# 猛赤について

## ―『成唯識論』を中心として―

研究生　田嶋　光寿

猛赤とは『新導成唯識論』の科文の名称である。その科文猛赤は、『成唯識論』では、『唯識三十頌』の第一頌の上三句の解釈に位置する。外道・諸派の我の種種の相を批判して我執を説き、外道・諸派の法の種種の相を批判して法執を説き終わり、その次に位置するのが科文猛赤である。その科文を示せば破外道と破小乗となる。破外道では、火と火に似る人と、火と火に似る人との共法(猛と赤)があり、それぞれが仮説という仮に言葉をたてることの依り所になることが否定される。そして小乗がたてる真事も仮説・言説の所依とはならないと否定されるのが破小乗である。

この真事を個有の特質である自相としたうえで、仮智と言葉で言い表す詮とは、自相を得ないという解釈をするが、これが『成唯識論』の理解である。詮は自相には及ばないことを説明して、たとえば、色法は大きさと形を持ち他のものが入りこまない礙があることを自性とし、火は暖性があることを自性とする。水の冷たいか暖かいかは触れてみなければ分からないことを冷暖自知というが、それと同様に、証知することであり、そこに言葉は介在しない。一方、共通の特質である共相は言葉・名称と関係する。法の自相と共相が言葉、特に名称との関係の有・無によって区別される。そのことは識の機能にも関係する。言葉が介在するときは、心のはたらきは共相を対象とする。第六意識はいくつかに分類されるが、散位における意識は、五識の後にはたらく意識ということで、五後意識と言い習わされる。五識と同時にはたらき、自相をとる意識に五倶意識があるが、散位における意識は、概ね五後意識に代表され、名称を介在することから共相となり、したがって自相は名称の介在のない心のはたらきとなる。

このように『成唯識論』では、言葉と関わるのは共相で、自相は言葉とは関わらないのだが、そのうえで、言葉と自相の関係に言及する。たとえば、青という色を認識するときに、青の自相と関係したとき、すなわち眼根を所依として青という色法を眼識が対象としたときには自相となるが、言葉でもってそれを青だと了解したときには、すでに自相ではない。しかし、青の自相を言葉で表現しようとするから、青の解が生じる。故に青の自相は言葉の「間接」の依り所ではある。そのことを、基『成唯識論枢要』では、「手を以て月を指す如し」と言う。つまり、月を指差すときに、月そのものに触れることはできないが、指差すことでその方向性は確保し得ていることである。このような関係性は、『成唯識論』の記述によれば、真事（自相）→増益→似事（共相）と考えられている。つまり、実有ではない共相が「直接」の言説の所依となり、自相が「間接」の言説の所依となる。法の自体相（自相）の上に、存在しないものを存在すると増益したものが共相となるのである。